

癌治療（人生学 第14回）

高 橋 清 隆

はじめに

病気で苦しむ人は多いようです。

病気が治ったらどんなにいいだろうと思っている人たちは少なくないと思います。

いろいろな宗教で、自分たちの宗教や教祖が病気を治したということを伝えたがるのも、そのようなことがあるためだと思われます。

病気を苦に自殺する人もいるわけですが、自殺するくらいなら、放っておいて病気で死んだ方がましというのは、病気で苦しんだことのない人の考え方で、こんな苦しみが続くくらいなら死んだ方がましということで自殺するのだと思います。

病気は、薬や手術によってのみ治るわけではないというのは、昔からよく言われてきたことなのですが、靈感やら気だとか言われても、理解しにくいというのが正直なところです。

今回扱った、ケリー・ターナー著、長田美穂訳『がんが自然に治る生き方』（プレジデント社、2014年11月23日）は、帯に「ハーバード大学卒、カリフォルニア大学バークレー校博士」という著者の肩書きがあり、宗教や靈感や気によるものではないと思い、ほんの少しでもいいから参考になればと思って、買って読んでみたのですが、ほんの少しどころか、大変参考になりました。

そして、この本は、単に癌を治すためだけの本ではなくて、人生の大切な意味を教えてくれている本なのではないかと思ったのです。

1 『がんが自然に治る生き方』

「医学的には手遅れだったはずのがん患者が、見事に回復を果たす事例」を、著者は「がんの劇的寛解」と名付けます（4 ページ）。著者は、そのような事例の医学論文を1000本以上分析し、劇的寛解の経験者の100人以上にインタビューしています。以下、引用してみます。

わたしは、質的分析の手法で、これらの症例を何度も詳細に分析しました。その結果、劇的な寛解において重要な役割を果たしたと推測される要素——身体、感情、内面的な事柄——が七五項目、浮かび上がりました。

しかし、全項目を表にして出現頻度を調べると、七五のうちの上位九項目は、ほぼすべてのインタビューに登場していることに気づきました。（13ページ）

その9項目は次のものです。

- ・抜本的に食事を変える
- ・治療法は自分で決める
- ・直感に従う
- ・ハーブとサプリメントの力を借りる
- ・抑圧された感情を解放つ
- ・より前向きに生きる
- ・周囲の人の支えを受け入れる
- ・自分の魂と深くつながる
- ・「どうしても生きたい理由」を持つ

(13～14ページ)

この9つの項目は、そのままこの本の章立てになっています。

この本は、立花隆さんの『臨死体験』と同様、多くの人に取材し、机上の空論を展開しているわけではないところが、私がひかれた理由です。実際に、癌が治った経験者の話を分析しているところがすばらしいと思うのです。

2 癌の原因

『がんが自然に治る生き方』を読む前から、私は、癌というのは「生きたくない病」だと理解していました。

ウイルス性の伝染病と異なり、癌というのは自分の中から出てくるものです。

そして、「生きたくない病」の気配が全くない人はいません。死にたい、とまでは思わなくても、生きるのが辛いと感じたことのない人というのは、ごくわずかなのではないのでしょうか。思っていること、考えていることというのは、自分の体に影響を及ぼします。生きることに積極的でなくなると、体もそのような方向へと行くのです。第1章「抜本的に食事を変える」の中でジョンが言う「がんは誰の体にもあるものだ」(53ページ)という言葉は、病気の治し方を扱っている気や精神世界の本には必ずといっていいほど書かれていることです。通常は、癌が生じて、適宜、体から出ていくらしいのですが、生きることに消極的になると、徐々にたまってくるのだそうです。

あるいは、第3章「直感に従う」で、スーザンは「あくまで病気はエネルギーの詰まりです」(127ページ)と述べているのも、精神世界の本でしばしば見かけます。

スーザンによると、心と身体は同じ物質(=エネルギー)で構成されています。そしてある感情パターンはエネルギーの詰まりを生み、それが高じて病気を生じさせるのです。

この考えは、病気とは純粋に物理的な状態と考える西洋医学とは、まるで異なります。西洋医学では、病気は、最近やウイルスなどが身体に侵入して起こすものと考えます。したがって病気は、

手術や薬の投与によって侵入者を取り除けば治るとみています。

それに対してスーザンは、病気とは、強迫的な思考パターンや負の感情がエネルギーの停滞を起こし、それが長く続くことで身体に影響をおよぼした状態であると言います。

わたしはスーザンに、あなたのがんは強迫的な思考パターンが原因だったと思うか、と聞きました。

医師のいうがん、つまりエネルギーが詰まって腫瘍化した状態は、わたしがいま説明したようなパターンが長い間積み重なった結果、生じたのだと思います。だから、腎臓がんなら、その人の恐れ
れの感情の蓄積が原因かもしれない。肺がんなら、悲しみなどの解消されなかった感情が原因かもしれない。凝り固まった思考パターンを細胞が記憶して、病気を引き起こすのだと思います。

（127～128ページ）

この、エネルギーの詰まりという考え方は、適切だと思います。

水は流れているときれいですが、たまった水は汚れやすくなります。ためてしまった思いが、腐敗してくるような気がします。

3 食事、ハーブ、サプリメント

『がんが自然に治る生き方』の第5章「抑圧された感情を解き放つ」の冒頭で、著者は「わたしにとって驚きだったのは、劇的な寛解の経験者が実践していた九つの項目のうち、身体にかかわることがたった二つ（食事を変える、ハーブやサプリメントを使う）しかなかったことです。残りの七つは、感情や精神にかかわることでした」（175ページ）と述べています。

これはそのとおりであり、癌は食事によって生じることはほとんどないと思われます。

けれども、食事、そして口から入れるものは、私たちの体に大きな影響を与えることははっきりしています。第1章「抜本的に食事を変える」の中で、ロンは、「がんは嫌気性でブドウ糖を代謝する。だからブドウ糖の供給を断てば、がんは栄養を取れなくなるんだ」（25ページ）と述べています。また、ジニは、「本を何冊も読んで知ったのは、わたしたちの食事は毎日がん細胞に餌をまいているようなものだということ」（43ページ）と述べています。砂糖、乳製品、肉、精製した穀類などは、この本のみならず、いろいろなところで過剰な摂取をいましめています。これらの食品に害があるかどうかは、私にはわかりませんが、手っ取り早く栄養を取りたい時に便利で、しかもおいしいと感じやすい食品であることは確かです。

『がんが自然に治る生き方』に書かれていることではありませんが、これらの食品を食べる時、少なくとも私は、これらの食品に対する感謝の気持ちを持つ余裕なく食べてしまっていることが多いです。ほとんどの食品は、野菜・果物も含めて、命をいただいています。食べられるために命を与えてくれた食品に感謝しつっただけ、体に悪いと言われているような食品でも、ほとんど害はなさないと思うのですが、「おいしい」という感覚が強い食品は、その感謝の気持ちを忘れがち

になり、よく考えずに大量に摂取してしまうことが問題だと思います。乳製品も、牛に感謝しながら食べれば問題ないのですが、チーズを食べる時に、いちいち牛のことを考えない人が多いのではないのでしょうか。

また、この本では、水について触れていますが、全く別の気功の本で、水道水をやめてミネラルウォーターにして癌が治ったという記述を何度か目にしました。ほんとうに癌になった場合、それはやってみて損はないかもしれません。

第1章の中でジョンの発言にある「がん細胞を飢餓に追い込んで」(50ページ) しまうために、断食という方法も考えられます。ある治療者の発言として、「動物や有機生命体のほとんどは、病気になるとものを食べなくなります。それが体を治すための自然なやり方だからです」(38ページ) とあるように、動物は、調子が悪い時には、物を食べずにじっとして自分で治します。

ただ、断食もやり方を間違えると、害が生じることもあるでしょう。

私たちの生きる基本は、食事によってエネルギーをいただいて、そのエネルギーによって、まわりをあたたくすることだからです。

さらに、第4章「ハーブとサプリメントの力を借りる」は、次の引用に象徴的です。

現代医療はがん細胞を、身体への侵入者で防御しきれないほど強靱な敵と見ています。これに対して代替医療では、身体と心と魂の三位一体がよい状態にあれば、がんは身体が退治できると考えます。両者の違いは、医学ではがん細胞をいかに殺すかを考え、代替療法では身体と心と魂の状態をいかによくするかを考える、ということです。そのため代替療法では、植物性のハーブやサプリメントを推奨しています。がん細胞が体内で生存できなくなるほど、体内環境を強く健康的にするのが目標です。

(139ページ)

144ページでは「体内洗浄」という言葉が使われています。

植物を中心とした自然のものは、宝箱のようなものです。いろいろな薬も、世界各地の昔からの知恵で見つけられてきたものも少なくありません。植物の中には、毒や、害をなす成分を含んだものもありますが、それらでさえ、うまく使いこなせば、薬になったりもします。

ともあれ、第1章「抜本的に食事を変える」と、第4章「ハーブとサプリメントの力を借りる」は、あくまでも補助的なものです。

結局、癌を治す力は、自身の中にあるのです。

4 シンの物語

『がんが自然に治る生き方』の第2章「治療法は自分で決める」で、「がんから劇的な寛解を遂げた人々は医師の言いなりにはなりませんでした」(61ページ) と書かれているように、従来の癌治療は、癌への理解に欠けているものです。癌は戦う相手ではありません。それにもかかわらず、

現代の医学は癌を戦う相手として捉えているので、癌を治すどころか、悪化させているのではないかと思われる事例さえあります。

同じページに「自分の意志で人生を変える」とあるのは、癌への対応でもあるのですが、これは人生そのものへの対応です。結局、自分の人生を変えようと思ったら、それができるのは自分だけです。

癌というのは、人生の階段を上がる一つのきっかけです。

第2章の後半で取り上げられているのは「シン」と称される日本人、寺山心一翁（てらやま しんいちろう）の物語です。激務の末、46歳の時に腎臓癌になったのですが、病院の臭いに耐えきれずに、夜、屋上に行ったところ、自殺すると誤解され、病院を追い出されます。物が食べられず、ミネラルウォーターだけを飲むことになり、結果的に断食をしたのと同じことになりました。著者は、「水断食で二、三日すごすと、わたしたちの臓器はどんなウイルスや細菌、死んだ細胞をも排出することが、研究で明らかになっています。一日三回、食べ物を消化する作業から臓器を解放してやれば、臓器は自分を洗浄できるのです」（81ページ）と述べています。シンは、マンションの屋上に毎朝上がり、太陽に向かって「僕はまだ生きている！」と言うのが日課になります。「この広い宇宙で僕らが受け取っているエネルギーは太陽光だけだ、ということに気がつきました」（81ページ）とシンは述べます。そして、鳥が日の出の42分前に鳴き始めることに気づきます。「鳥が鳴くにはたくさんの酸素が必要なので、朝、植物が光合成をして酸素を出しはじめたころには鳴くのだろうと推測しました。この小さな実験で、シンは確信しました。鳥が鳴きはじめ、日が上るまでの四二分間の空気は、特別に新鮮である。そしてがんが転移した右肺にとって、その空気はとてもいいものだろう、と」（85ページ）。

シンがたどり着いたのは、他の癌患者が至らなかったところです。

家に帰ってから僕は、なぜがんになったのか考えはじめました。そして思い至ったんです。がんを生み出したのは、睡眠もとらずに働き続けたこの僕なんだと。気がついたんです。自分が生んだということは、がんは僕の子どもみたいなものじゃないか。だったら僕は、がんに愛を送ろう。そう思いました。すると痛みが軽くなって、その夜はよく眠れたんです。翌朝、目が覚めると、気持ちも頭もすっきりして、いつも使っていた鎮痛剤がいなくなりました。それから、鎮痛剤は使わずに、もし痛くなったら話しかけることにしました。「そうか、痛いんだね。ありがとう、教えてくれて。君は僕の子だ。愛してるよ」。

僕が右の腎臓のあたりを触って「愛してるよ」とがんに話しかけると、痛くなくなるんです。だから僕は朝から晩まで、がんに語りかけて、愛を送りました。無条件の愛ですよ。「そこにいてくれて、心からありがとう」と僕は話しかけたんです。（85～86ページ）

これはそれこそ「あなたがたは敵を愛しなさい」（ルカによる福音書6章35節）を地で行くものです。この言葉の真意は、「ほんとうは敵なんかいない」（松井五郎作詞「Spirit」より、ウルトラ

マンコスモスの主題歌)なのですが、シンはそれに気づいたために、他の人たちよりも一歩踏み込んだところにまで至ったのかもしれません。

しかし、それで十分ではありませんでした。

まだがんが体内に残っていても、余命三カ月と宣告された人が三年も生きている。その事実、人は驚きました。講演の依頼は、スコットランドにあるフィンドホーン財団からもやってきました。

(92ページ)

以下はシンの言葉です

フィンドホーンでは、みんなが僕にハグをしてくれるんです。朝は「おはよう、シン」と言ってハグ、午後のハグ、夕方のハグ、そしてお休みのハグ。朝から晩まで、信じられないほどに強烈に、無償の愛を感じました。日本では、僕らは言葉は交わすけれど、抱きしめたりはしません。でも実は大切なことなんです。ハグによるコミュニケーションは、オーラの層を使うものだから。ハグによって僕らは、オーラの層を使ってエネルギーをお互いに交換するというコミュニケーションができるんです。

(93ページ)

これに続けて著者の言葉があります。

二人の人間が抱き合う瞬間に、互いのオーラが融合する。シンはハグという行為が人間相互のエネルギー交換を促すのだという仮説を立てました。この仮説は、私が取材した多くの代替療法の治療者の考えとも一致するものでした。

シンは三年間、自分のがんに向かって愛を送り続けていたものの、彼自身は十分な量の愛のエネルギーを他の誰かから受け取っていなかったのかもしれません。日本の文化は保守的で、人はあまり身体を使った愛情表現をしないのです。フィンドホーンの見知らぬ人々が与えてくれた多くの抱擁と無条件の愛は、シンを支えるエネルギーの源となりました。

一カ月の滞在を終えて帰国すると、ちょうど半年に一度のCTスキャン撮影が待っていました。驚くべきことに、撮影画像には、もうがんの痕跡はありませんでした。

半年前の撮影時から少しずつがんは消えつつあったのでしょうか。けれどもシンは、フィンドホーンに滞在した一カ月が、身体からがんを消す決め手になったと確信しています。わたしが「結局あなたのがんを消したのは何だったと思いますか」と聞くと、シンは即座に答えました。「無条件の愛です」。

(93～94ページ)

5 周囲の人の支えを受け入れる

無条件の愛など自分は受ける立場にない、と思っている人は多いのではないのでしょうか。『がんが自然に治る生き方』の第7章「周囲の人の支えを受け入れる」は、驚くべき内容です。自分は誰にも愛されていないと思っている人には、この本の中でいちばん驚きの章なのではないのでしょうか。

ここでは、まず、キャサリンの言葉を2つ紹介します。

がんになって私が学んだのは、わたしは大切な存在なのだ、ということでした。世界がそう認めてくれたのです。そして人は誰もが、大切な存在なのです。わたしだから大切なのだという意味ではありません。誰の人生も大切で、そこに私も含まれるということです。「誰もわたしをかまってくれない」なんて、二度と思ったりしません。

（273ページ）

がんは、人生最良の経験でした。わたしは、昔の自分にはできなかったことを含め、多くのことを学びました。人には愛がある。そして人は愛したがっている。愛はわたしたちの遺伝子に組み込まれているのです。人は愛を与えるチャンスを求めています。愛を循環させるためには愛を受け取る人が必要なのです。それがあってこそ、互惠の関係が成り立つのです。わたしが学んだのは愛を受け取る方法でした。

（275～276ページ）

シンの物語にもあったように、この世での喜び、この世での学びというのは、結局のところ、あたたかいエネルギーのやりとりであるように思います。だから、著者が提案しているように、電話したり、手伝ってほしいことがあると伝えることは大切です。

また、知人が癌になった時のことも、具体的に書かれています。

いつも支えてあげなければ、と強迫的に考える必要はありません。あなたの愛情が、その人に伝わればそれでいいのです。何日かに一度電話する、メールを書く。それだけで、その人にあなたの気持ちが伝わります。長期的に、その人の気持ちを支え、ひいては免疫システムの働きを強化することにつながるのです。

（280ページ）

6 人生を楽しむ

この本の第3章「直感に従う」の中のジェンマの言葉は、本書の一つの山なのではないでしょうか。

がんを克服した著者の本のなかに、こんな一節がありました。「がんと静かに向き合って、がん聞いてみたらいい。どういう理由で君はやってきて、どうやったら去っていくのかな、と」。さっ

そくわたしも聞いてみたんです。「どうして来たの」って。わたしは運動もしていたし、食べ物には有機食材を選んできました。四人の子どもたちにも、身体にいいと思うものを食べさせてきたんです。返ってきた答えは、衝撃的なものでした。「だってあなたは人生を楽しんでこなかったでしょ。いつも、膨大な『仕事のリスト』に振り回されて。人生のよろこびなんて、あった？」

(108ページ)

同じ章のスーザンの言葉も方向性を示しています。

わたしはつきあう人を選ぶようになりました。西洋医学に頼らないことにした、と話すと、多くの友人が離れていったのです。友人たちは言いました。「あなたが死んでいくのを見たくないから、もう会いたくない」。このようなエネルギーレベルの低い人のそばには、わたしだっていいたくないと思いました。彼らは、わたしが死へ向かっていると考えていたのです。実際は逆なのに。できるだけ高いエネルギーを持つ人と一緒にいたい。わたしはそう考えるようになりました。

(121ページ)

第5章「抑圧された感情を解き放つ」のはじめのあたりで、「病気とは、わたしたち人間の身体・心・魂のどこかのレベルで詰まっているものである」(176ページ)と指摘されます。その章では、「詰まっているもの」を「抑圧された感情」と言っていますが、それは、怒り、恐れなどの否定的な感情のみならず、「一方でわたしたちは、幸福感など肯定的な感情にも執着します」(179ページ)と指摘されるように、時には「良い」とされるものにも囚われてしまうことがしばしばです。

それでは、囚われないためには、どうすればいいでしょうか。

第6章「より前向きに生きる」のサランヌの笑いごっこは示唆的です。

わたしは娘に言いました。「これから毎日、必ず笑うって約束しよう」。娘は「それって、毎日遊ぶ約束をするってこと?」。「そうよ。お母さんと笑いごっこをしてほしいの。今日から毎日、必ず、二人で笑わせ合うのよ」。娘は「それって、一緒に遊ぶお友だちになるってこと?」。わが子の言葉を聞いて、わたしははっとしました。わたしはどうして、こんなふうになってしまったんだろう。どうして、わたしには遊ぶ友だちがいなくなってしまったの? いつの間にわたしは、誰とも遊ぶ約束をしなくなったの? 離婚に引っ越し、そして多くの苦難がありました。生活費を稼ぐストレス、子育てのストレス、家族の病気もありました。こうしたストレスによって、わたしの日々の生活からよろこびや楽しみは吸い取られていたのです。がんになったのも、当然かもしれません。

(228～229ページ)

それに続けて著者の言葉です。

サランヌは娘と、笑い合うためにすべきことのリストをつくることにしました。娘があげたのは、おもしろい声を出す、変な顔をする、ドレスアップする、踊る、そしてジョークを言う。シンプルなアイデアが娘の口から続々と飛び出しました。サランヌは思わず手を止め、また考え込んだのでした。大人になってからは、生活の中に単純なよろこびを見いだすことを、すっかり忘れていました。（229ページ）

大人になると、お金を使う遊び、何かに執着する遊びばかり考えがちです。しかし、ほんとうの遊びというのは、お金をかけなくても執着しなくてもできるものなのかもしれません。サランヌの娘さんの言葉は、生きる上での楽しさを生み出す知恵にあふれていると思います。

二度の再手術と四〇時間の放射線治療、ほぼ切れ目なく続く抗がん剤治療。そこでサランヌは、この厳しい西洋医学の治療を乗り越えようと、心、感情、魂を癒やすためさまざまな取り組みをはじめました。

一つは、直感に従って、人生で遭遇した憎しみや怒りを覚えた出来事と、過去の抑圧された感情を手放す作業でした。

サランヌは、つきあう人も変えました。物事に否定的だったり、「寄生的な人」とはなるべくつきあわないようにして、逆に、笑わせてくれたり、好きだと思わせてくれる人と過ごす時間を増やすようにしました。これは効果てきめんでした。こうした好ましい人たちと会った日の夜は、疲れどころか元気が出るのです。（231ページ）

結局、サランヌは、ダライ・ラマ法王の主治医であったドンデン医師に処方してもらったハーブを服用することにより、がんの形跡が消えることになるのです。

どんなに病んだ日も、恐怖に打ちひしがれた日も、一日五分だけでいいから笑う、または幸せを感じる時間をつくる。彼女はこれを自分に課してきました。何年もの厳しい治療に耐えていたときも、この習慣のおかげで、身体と心と魂は元気でいられたとサランヌは考えています。

（243ページ）

人生を修行と捉える考え方がありますが、それでは、人生は辛い修行の連続になってしまいます。修行というよりは、体験し味わい理解するといった方が、現実在即しています。

あまりに楽すぎると物足りないので、適度の学びを用意している人がほとんどなのですが、その「学び」を、不幸、不運、修行、と捉えるのか、そうでないかで、その人にとっての人生の意味が大きく変わります。

学びは、結局は、あたたかさを理解することなのです。修行、修行と捉えていたのでは、あたたかさのやりとり、あたたかさの触れ合いが汲み取れない可能性があります。

もっと、人生の本質に目を向けて、あたたかさ、楽しさを味わおうということを、癌は教えてくれているのかもしれない。